「注意障害に対する学習カリキュラム」の開発について

○武内 洵平（障害者職業総合センター職業センター開発課　障害者職業カウンセラー）
　坏 千弘　（障害者職業総合センター職業センター開発課）

１　はじめに

障害者職業総合センター職業センター（以下「職業センター」という。）が実施している高次脳機能障害者を対象としたプログラムには、休職者を対象とした職場復帰支援プログラム及び就職を目指す就職支援プログラム（以下「プログラム」という。）がある。プログラムの実施を通じて高次脳機能障害者の自己認識の促進、補完手段の習得及び高次脳機能障害者を雇用している事業主又は雇用を検討している事業主に対する支援を目的とした技法の開発等を行い、地域障害者職業センター（以下「地域センター」という。）及び就労支援機関等で実施する高次脳機能障害者に対する就労支援に資するためにその成果の伝達・普及を行っている。

高次脳機能障害者に見られる症状は多岐にわたる。2008年に東京都で行われた退院患者調査[1)]によれば、記憶障害、行動と感情の障害、注意障害の順に多いことが報告されている。また、2012年に障害者職業総合センター研究部門が地域センター（52所）を対象に実施した調査[2)]では、地域センターがジョブコーチ支援を実施した高次脳機能障害者（112名）に見られた症状の内訳として記憶障害（74名）、注意障害（56名）、遂行機能障害（47名）の順に多く、作業遂行上の問題点について「作業・入力ミス」「処理スピード」など注意機能に関する項目が上位になっている。

職業センターでは、記憶障害のグループワーク（実践報告書№38）は、2021年度に、感情コントロール支援のグループワーク（実践報告書№33）は、2019年度に開発し、実践報告書に取りまとめている。

これらの調査研究から注意障害に対する支援の必要性が高いと考え、職業センターでは高次脳機能障害者の就労支援における注意障害に対する学習カリキュラム（以下「カリキュラム」という。）の開発を行うこととした。

２　注意障害の認知リハビリテーションについて

1996 年に Barbara A.が創設した英国の The Oliver Zangwill Centre（以下「OZC」という。） は神経心理学的なリハビリテーションを行う専門施設として開設され、注意障害の認知リハビリテーションと遂行機能障害のゴールマネジメント訓練等のグループワークが実施されている。

このグループワークの構成は、注意とは何か等の知識付与の講義、会話しながらトランプカードを並べ替える等の日常生活場面の課題、ホームワーク、意見交換を通じ、自己認識の促進を目指す内容となっている。グループワークの効果として、注意障害のみならず遂行機能の改善についてのエビデンスが示されている[3)]。

また、注意障害の認知リハビリテーションとして注意の持続、選択、転換、分配に対する訓練課題を合わせた機能回復訓練である APT（Attention Process Training）が広く知られている[4)]。

職業センターでは OZC のグループワークを参考に APT の訓練課題の要素も取り入れ、職業リハビリテーションの領域でも有効に活用できる内容を採り入れ、カリキュラムを開発し、プログラムにおいて試行している。本発表では、カリキュラムの概要や試行実施の状況について報告する。

３　カリキュラムの概要

(1) カリキュラムの目標

OZCでは、グループワークの目標を「注意に対する気づきの程度を増やす、メタ認知のスキルを高めること」　としており、職業センターのカリキュラムの目標としても、①自分の注意の特徴を知り、説明できるようになること（メタ認知スキルの向上）、②自己対処の方法、職場に求める配慮事項について整理すること（対処手段の整理）とした。

(2) カリキュラムの構成

カリキュラムは、「講義」（注意機能に関する知識付与のための講義）、「体験ワーク」（注意機能がどのようなものか体験、理解するための図形の抹消課題等のワーク）、「意見交換」（自己認識の促進を目指す意見交換）を組み合わせた全５回のグループワークで構成している（表１）。また、グループワーク実施後に、注意機能の気づきを促すため「個別面談」やホームワークとして「プチトレーニング」を行っている。

４　カリキュラムの実施方法

(1) 対象者

プログラム開始にあたり取得している「主治医の意見書」において注意障害と記載のあった受講者の中で、カリキュラムを希望する者に実施。

(2) 人数

１グループ最大５名で実施。

⑶ 時間・回数

１回120分、第４回までは毎週１回連続して実施し、第５回は第４回の２週間後に実施。

⑷ 支援体制

試行実施では基本として、「進行役」「板書役」「個別のフォロー役」の３名の支援体制で行った。

⑸ 効果測定

効果測定としては、①プログラム中の行動観察、②注意力に関する自己認識についての質問紙の記入（試行実施の前後）③標準注意検査法（CAT）の実施（試行実施の前後）及び④ワークサンプル幕張版を一部実施した。

表１　カリキュラムの構成

	第１回	第2回	第3回	第4回	第5回
講義	・高次脳機能障害とは ・注意の４つの機能 ・注意の持続と選択	・注意の配分と転換 ・対処手段とは ・自己対処の工夫と環境調整	・注意を妨げる要素 ・注意と外的環境 ・注意と内的環境	・自己観察日誌の活用	・これまでの講義内容の復習
体験ワーク	・ニュース記事の聞き取り ・抹消課題 ・動物探し ・文書校正	・トランプ課題 ・仮名ひろい ・抹消課題	・静か/騒がしい、きれい/散らばっている環境下で作業体験 ・呼吸法/リラクゼーション技法	・パーテーション/PC読み上げ機能/ルーペ/画面拡大などの工夫についての体験	・プレゼンテーション資料を作成して発表
意見交換	・自己紹介 ・体験ワークの振り返り	・体験ワークの振り返り ・効果がありそうな対処手段について	・体験ワークの振り返り	・効果がありそうな対処手段について ・どのような対処手段を用いるか目標の共有	

５　カリキュラムの実施内容

⑴ 第１回

注意の４つの機能のうち「続けられる力（持続）」「見つけられる力（選択）」について講習と体験ワークを行う。

⑵ 第２回

注意の４つの機能のうち「同時に注意を向ける力（配分）」「切りかえる力（転換）」について講習と体験ワークを行う。

⑶ 第３回

注意を妨げる要素として外的環境（視覚的刺激・聴覚的刺激・温度湿度等）、内的環境（感情・体調・興味）について解説しそれらを整える方法について講習と体験ワークを行う。

⑷ 第４回

様々な対処手段の体験を行う中で、受講者それぞれの注意の特徴について意見交換を交えて整理する（強み、課題、苦手な場面や要因、対処方法）。

⑸ 第５回

受講者それぞれの注意の特徴、対処手段、職場に配慮を求めることについてシートに整理して発表する。

６　試行状況

試行実施状況は下記のとおりであった。

⑴ 対象者

１クール目の対象者は30代男性１名、40代男性１名、２クール目の対象者は50代男性１名、50代女性１名である。

⑵ 結果と考察

PC入力や書類作成の際に数字の抜け漏れが課題となっていた対象者が、画面拡大やルーラーの使用等の補完手段を自ら実践することで、抜け漏れを減少させていた。また、注意を妨げる要素として易疲労性に気づき、１時間に１回休憩することでミスの減少に努めていた対象者もいた。

注意に関する自己認識の質問紙においては、カリキュラム後、全ての対象者が、「自分の注意力の特徴を周囲に説明できる」と回答するとともにプレゼンテーション資料を作成して発表することができる等の効果が見られた。

標準注意検査法（CAT）においては、聴覚性検出課題の受講後の正答率が受講前と比較して高くなった対象者がいた。

ワークサンプル幕張版においては、正答率や作業時間に大きな違いは見られなかったものの、先述の行動観察のとおり、カリキュラム後はご自身に合った補完手段を自ら実践する様子が窺われた。

以上の効果測定の結果から、本カリキュラムは、注意障害に対する自己認識の促進や、注意の補完手段の活用の促進について一定の効果があったと考えられる。

７　今後の方向性

現在、上記結果や対象者との振り返りを踏まえ、さらなるカリキュラムの改善に取り掛かっているところである。今後は改善したカリキュラムによる３クール目の試行実施を行い、支援の概要や実施方法、留意事項、支援事例等を取りまとめて実践報告書を2023年３月に発行する予定である。

【参考文献】

1) 東京高次能機能障害者実態調査検討委員会「高次脳機能障害者実態調査報告書」,2008.
2) 障害者職業総合センター『高次脳機能障害者の働き方の現状と今後の支援のあり方に関する研究』,「調査研究報告書№121」,(2014),p.22-28.
3) 青木重陽他監訳「高次脳機能障害のための神経心理学的リハビリテーション英国 the Oliver Zangwill Centerでの取り組み」,医歯薬出版,2020,p.77-93.
4) 鹿島春雄他「認知リハビリテーション」,医学書院,1999, p.102-114.

【連絡先】

障害者職業総合センター職業センター開発課
e-mail:cjgrp@jeed.go.jp　Tel:043-297-9044